

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

工事担当は中間管理職？

現在当社では、新人はま

ず工事担当としての登竜門をくぐり、それからそれぞれの適職に配属される。そういう意味ではリフォームにとっては、基本的なキャリアパスだ。

たくましい男世界を連想する工事部門だが、昨今、工事担当は男性だとは限らない。新入社員が女性のほうが多い年ほど、工事部門の女性が目立つ。

毎日電車で、つなぎの工事を着て現場に向かう彼女たちはどう思っているのだろうか？ 母校の後輩が入ってくると、推薦してくださっている教授の顔も浮かび、人知れず心配しているのだが……。

しかし、彼女らはいったって明るい。元気はつらつ！とはこういうことかという感じだ。

学生の時には紙の上の図面でしかなかったものが、実際の建物が日々、造形として作りあがるのだ。昨日より今日、今日より明日と計画が実際に立体化していく喜びに、目をキラキラさせている。

リフォーム工事は新築工事以上に大変だと言われて

いる。

「リフォーム工事が出来る人を尊敬する」と言っていた新築部隊の人もいる。ゼロからスタートするのはなく、何年か前にスタートした建物を、バトンタッチして永く住み継ぐ次のステップに引き上げるのだ。バトンタッチはそう簡単にはいかない。

開けてみたらびっくりの躯体状況だったり、マンションなどは他の住民から工事の音がうるさいと怒鳴り込まれたり……。同じマンション内に受験勉強の方や、妊婦さんがいる場合もある。

また、着工前に入念な打ち合わせをしたにもかかわらず、着工当日に施主から「やっぱり床暖房を入れることにしたわ」と、さらっと言われることもある。施主は金額だけが悩みと思っているが、工事担当にとっては、材料の発注変更・工程変更・職人の手配変更……と大変な事態となる。

職人からの要望と設計者からの要望との板ばさみに、「まるで中間管理職のようだ！」と、工事担当の悩みは深く、頭を抱えると

きもある。

大規模のリフォーム物件ほど、在宅工事は難しく、施主は仮住まいをして、不在だ。リフォームしやすい利点はあるが、工事途中の工事担当の努力を目にする機会も少なく、出来上がっての感謝の言葉は、営業担当やリフォームプランナーに集中する。

こんなに割の合わない仕事を、なぜ続けているのだろうか？

それは「やってよかった！」と、喜びの声を上げる施主の声が彼らを支えているのだ。ダイレクトなお礼の言葉はなくとも、出来上がった時の笑顔がすべての大変さを忘れさせてくれる。

そして「建築の中でも住宅はおもしろい。そして新築よりもリフォームはもっとおもしろい」と声をそろえる。

彼女ら彼女らは、お引渡しの際に完了書をいただき、保証書と取り扱い説明書ファイルをお渡しすると、「さあ」と掛け、また次のお宅へと向かう。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。